

西の菜時記

特集：山口における高杉晋作〜ゆかりの地と、人物エピソード

◆山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360◆

平成26年3月29日発行
第32号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

貴船神社（宮野江良）
長州藩最初の洋式軍艦に乗り込み、のち藩の海軍総督となる晋作のことで、水神を祀るこの神社に必ずお参りしたことでしょう。



貴船神社（宮野江良）

宮野江良の借家
文久3年9月、晋作は、静間某の家を借りて、暮らし始めました。創設した奇兵隊の総督を罷免されたあとのことでした。場所は宮野江良。山口町とは尾根をへだてたところにあります。近いけれど隔絶した感がある、いまでものんびりとした雰囲気のところ。

山口（中河原）御茶屋跡
一の坂川にかかる御茶屋橋のところに、江戸時代、山口御茶屋がありました。山口における藩主の休憩所でしたが、文久3年4月に萩から山口へ藩庁を移したときに、ここが庁舎とされました。文久3年（1863）6月5日、藩主に呼ばれた晋作は、ここで奇兵隊創設を進言しました。また、文久3年9月から翌年1月まで、晋作は、藩庁勤めをしており、ここに通勤していました。勤務時間は毎朝8時から夕方4時まで。そのときは、毎日一の坂川沿いを歩く姿が見られたことでしょう。帰りには、ぶらぶらと町をひやかして歩いたこともあったでしょう。一の坂川を歩くときは真面目に通勤していた晋作の姿を想像してくださいね。



山口御茶屋跡（中河原）

高杉家跡
慶応2年（1866）、四境戦争（第二次長州征伐）を戦った晋作は、病が重くなり、下関で闘病生活に入りました。10月、人を介して、白石の茶白山と合壁山の土地を購入しました。ここに高杉家屋敷を建てるためです。購入代金は自腹です。初めてのマイホームを建設するつもりだったようです。翌年2月には造築にとりかかり、来春には山口に行つて、自ら指示する予定と、父に伝えていきます。しかし、山口に来ることなく、4月14日に亡くなりました。



茶白山（白石）

古見家跡（大殿大路）
その後、重傷を負った井上馨を見舞いに山口に来たさい、古見家もしくは十朋亭に泊まり、そこで藩が晋作を捕まえようとしている情報に接し、神主姿に変装し、ここから逃亡したと地元では伝承されています。



古見家跡（大殿大路）

旅宿古見家跡
元治元年（1864）8月、外国の四ヶ国艦隊との下関戦争のあと、長州藩は和議を結ぶことになり、高杉晋作を萩から呼び出して正使に任じました。もともと戦争には反対だったと晋作でしたが、無事役目を果たすと萩に戻りました。ところが、すぐに石見国境の軍務管轄を任命され、9月2日、山口へ出てきました。このとき泊まったのが、堅小路と大殿大路の間にたつ、古見家という家で、旅宿をしていました。晋作は古見家に、2週間滞在しました。しかし、なぜか急に軍務の仕事が罷免され、抗議しても要領を得ないので、辞表を出して萩へ戻りました。その後、重傷を負った井上馨を見舞いに山口に来たさい、古見家もしくは十朋亭に泊まり、そこで藩が晋作を捕まえようとしている情報に接し、神主姿に変装し、ここから逃亡したと地元では伝承されています。



菜香亭に展示した等身大ハネル

山口における高杉晋作〜ゆかりの地

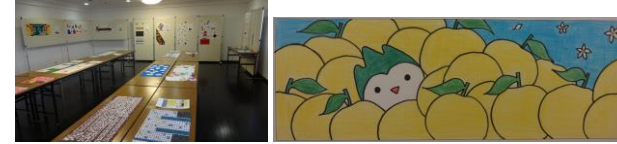
平成26年2月6日から4月6日まで、企画展「山口における高杉晋作〜転の季節〜」を開催。あまり知られていなかった山口市と高杉晋作の関わりを紹介しました。あらためてダイジェストで紹介します。

山口市菜香亭ご利用案内その①

◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

<市民ギャラリー出展作品の紹介>

てぬぐい展〜しかけのあるてぬぐいと山口のてぬぐいvol.3〜
—山口県立大学 生活美術研究室— 1/24〜1/26



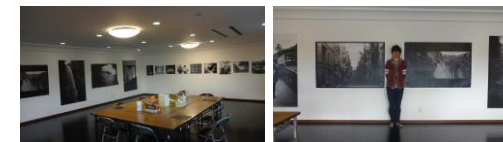
復興 SL山口・津和野写真展
—SL応援団— 2/6〜2/11



やわから写真展「ゆめうつつ〜いつかの物語〜」
—Yawacolor— 2/20〜2/23



山口大学文化会写真部「みちくさ」写真展
—山口大学 文化会写真部— 3/7〜3/10



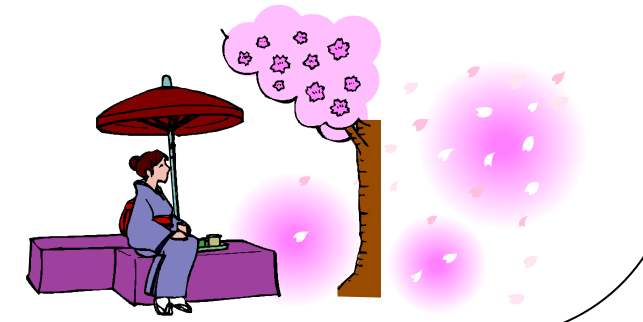
出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。
(お問い合わせ) TEL:083-934-3312
FAX:083-934-3360

笑顔の輪がひろがる山口〜絵手紙作品展〜
—山口絵手紙ぼすと倶楽部— 3/19〜3/24



<平成25年度 市民ギャラリーの予定> 4・5・6月

月日	時間	タイトル	主催者
4/12 〜13	9時〜17時 (最終日のみ16時まで)	山口っ子の絵と工作 えのぐる展	子どものアトリエ えのぐる
5/23 〜25	9時〜17時 (最終日のみ16時まで)	見つけた！山口のこんなところ にフランス語	エスカルゴ
6/4 〜9	9時〜17時	書友会展覧会	書友会



チシャもみ

菜香亭顧問 福田礼輔

旧菜香亭のおごうさん（斉藤清子氏）は、小イワシ、メバル、カサゴなど山口市に近い海で獲れる小魚や、チシャ、フキ、タケノコなど地野菜の郷土料理を自慢していた。

わけても、春になるとチシャもみが得意であった。

チシャなますとも呼ぶチシャもみは、江戸の頃から山口の家庭菜園にはチシャが植えられて季節の副食のひとつであった。

チシャは洋名をレタスというキク科の植物で、結球するものと自然体で生長するものに分けられる。

山口でのチシャは主として結球ではなく「かきチシャ」といわれ若葉から生長するに従って、茎の下部から葉をかきとり茎が生長し約50センチ以上に伸びるまでに及ぶ。

チシャは葉の色が赤味を帯びて、ちりめん状になったものが多いといわれ、摘みとった葉は喰べやすいように水にさらしアクをとる。イリコや小イワシは干物を、メバルやカサゴは焼魚でチシャの葉と共に和える。

チシャもみは長州武士から庶民にまで親しまれたふるさとの味である。

文化講演で来山した東大教授で歌舞伎評論家の河竹登志夫氏と菜香亭で会食したとき、出されたチシャもみに、氏は後日の自著の中で、山口菜香亭でチシャなますという料理で心ゆくばかりふるさと料理を堪能したと記述している。

サクラの季節がおとづれるとチシャの舌ざわりがよみがえってくる。

